

愛と死

武者小路実篤



講談社
文庫
講談社

愛と死

武者小路実篤

昭和47年 6 月15日第 1 刷発行

昭和55年 5 月26日第18刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社大進堂

© Saneatsu Mushanokoji 1972

Printed in Japan

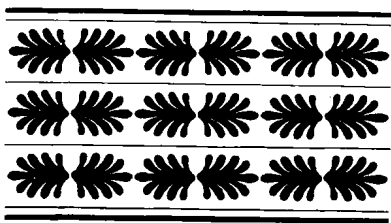
0193-310953-2253(1) 160円

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

愛と死

武者小路実篤



講談社

本書は、原著の文字づかいを尊重しながら、現代表記（新字・新かな）に改めた。

〈編集部〉

愛と死

目次

年 解 語
譜 説 注

竹
盛
天
雄

二四〇
二三四
二二〇

五

愛と死

これは二十一年前の話である。

しかし自分には忘れられない話である。

自分が野々村を始めて訪ねたのは二十五の時だった。当時のことは今でも忘れない。

その時野々村は三十でもう小説家として新進というよりも、もっと大家のように僕には思えた。今思うと少し可笑しいが、当時は三十にもなればもう一流の作家になれた時代で、野々村なぞ二十三・四で有名になり、三十位の時はもう大家の域に達しかけていた。少なくとも野々村のものを前から愛読していた自分にはそう思えた。

だから実際いうと野々村はもつとずっと齡上の男だと思っていた。逢って若いのに驚いたものだ。

野々村を僕が訪ねることになったのは、当時、僕はかく小説、かく小説悪口をいわれていたが、不思議に野々村はいつも僕のことを褒めてくれた。それで僕は最初の単行本を野々村に敬意を示して寄贈したら、ずいぶん厚意を持った批評をもらい、そのうえ暇の時遊びに来ないかと書

いてあった。

それで自分は喜んで、同時にいくぶん恐る恐る訪問したのだった。

逢えば気楽な男だった。今でも僕は野々村のことは野々村さんと言っているが、気持の上では当時からすっかり友達のような気になり、平気で生意気なことも言える仲になった。このくらい気のおけない何でもわかつてもらえる友達には滅多に会えるものでないと僕は喜んでゐる。

二

野々村もへんに僕を認めてくれた。買いかぶっているという言葉はつかいたくないが、他の人達はそう思っているだろうと思うほど、僕を認め、他の人が欠点だと思ふ処まで、僕の長所だと認めてくれた。

ここでは野々村のことを書くのが目的ではないが、野々村が僕に厚意を持ちすぎていることが、話の起こる一つの原因であるから、その点を強調しておくので、僕が有望な人間だったということを主張しようとは思わない。

しかし他人の悪評に対してはまた強くならざるを得ない。無責任な他人のいうことを一々気にしていたら、人間は落ちついて生きてはゆけない。

自分をいつわって生きてゆくのに、世間や他人を信用していない。

三

野々村は不思議な男というか、★天探女天探女というか、他人の賞めないものを感じしすぎる処があるかも知れない。ともかく僕は野々村が好きになって時々出かけたのだ。

野々村もいつも喜んで逢ってくれた。

野々村の処へ或る日ゆくと、五六人の女学生が庭で遊んでいた。

別に気にもしていなかったが、あまりにさわぎがひどいので、一寸ちよつとその方を見ると、二人の女が逆立さかだちの競争をしているのだ。

一人の方が勝って皆から拍手けいこをうけていた。

「しようない奴だよ。」

と野々村は言った。

何のことを言っているか僕にはその時わからなかった。

だが元気な女もいるものだと思った。

四

或る日野々村の処へゆくと門の処で、背のすらつとした快活な、しかしいかにも未だま蓄つぼみだだと思えない十七八の女の子に逢った。

僕を見ると丁寧にお辞儀じぎした。何処どこか野々村と顔が似ているので、僕も野々村の妹だと気がついて丁寧にお辞儀した。娘は馳かけだすようにして外へとんでいった。

これが野々村の妹で、このまえ逆立ちに勝った女だということはあとで知った。

僕はその後も野々村の妹に時々あったわけだが、記憶に一番よくのこっているのはその二度である。

しかしそれから二三年別に野々村の妹の存在を認めていなかった。

野々村の妹は美しいと誰かが言っているのを聞いたこともあるが、それは僕には別に問題にはならなかった。

僕も美しいと思つたことはあるが、しかし僕とは関係のなさすぎるのだと思つたから別に注意をしなかった。

また滅多に逢うこともなかったし、あまりに若くもあり、問題になりもしなかったし、尊敬する友達の妹をそういう目で見たとも思わなかった。

野々村はある時、「僕の妹は君のものを愛読している。」と言ったことがあったが、僕はそれを無頓着に聞き流すことにしていた。

一二年の間に、齡と言うものには不思議な働きをするもので、野々村の妹もすっかり女らしく美しくなり、或る日往来で逢った時は、似てはいるが、他人だと思った。野々村の妹がこんなに美しかったはずがないと思ったのである。僕は黙ってゆきすぎようとしたら、その女があわててお辞儀したので、僕は自分にしたのではないと思い、うしろを見たが自分より他に人がいないので、矢張り野々村の妹だと思ってあわててお辞儀したが、その時はゆきすぎたあとで、野々村の妹はそれを知らなかったらうと思った。

残念にも思い、ねるかったとも思った。

それから二た月程たった時、野々村の妹が三四人の友達と銀座を歩いているのを見たが、僕はお辞儀しようを用意していたが、野々村の妹は気がつかない顔してゆきすぎた。

自分は嫌われていると言う感じを受けた。

「勝手にしろ。」

美しく思え、お辞儀してもらいたかった反動でそんなことを感じた。もうお辞儀なんかしてやるものか。そんな子供らしい感じを持った。

しかしその時は本当に気がつかなかったのだとあとで聞いた。

それは本当らしく、その後また一二箇月たって野々村の家のおそばで逢った時、野々村の妹は丁

寧にお辞儀した。

僕はそれですっかり機嫌きげんをなおしたらしく、

「お兄さんはおうちですか。」

と聞いた。

「ええ、うちにおります。」

二人はそのまま別れたが、僕はいい気持になったのは事実だ。

しかしそれからずっと逢わなかった。別に逢いたいと思わなかった。

かくて野々村の第三十三回目の誕生日が来た。それは二月二十五日で僕にはその日は忘れられない日になった。

五

野々村の誕生日には野々村を中心として集まっている若い文士達が野々村の処に集まって、いろいろかくし芸なぞして愉快にくらすのが例になっていた。僕は野々村の処に集まる連中にあまり好きでない人がいるので、ゆかないようにしていたが、その日は何ということなしに行く気になった。

僕が行った時はもう五六人が集まり、愉快に話をしていた。僕もそのなかに入り、気の合った

連中と話をしていた。

その内に皆集まったといふので、十五疊じゅうごうの、いつも集合につかう広間の設けの席についた。両側に向いあつて坐まつた。野々村の妹も、末席にひかえていた、他に女の弟子でしが二人ばかり来ていた。簡単なサンドイッチや、すしなどが出てい、又菓子や果物くだものが出してあつた。酒も出た、僕は酒がのめないので食う方を専門にした。その内余興が始まつた。

だんだん順にやることになり、僕の処に順番が廻まわつて来そうになつた。僕はそれには閉口へいこうだが、断わればいいと思つて度胸どくちやうをすえていた。

ところが皆芸人で誰一人断わるものがなかつた。そしてついに僕の処に来た。

僕は何にも出来ないから許してくれと言つたが、皆は承知しなかつた。僕は真赤な顔して、閉口した。何かやれたらやりたいと思つたのだが、いくら考えてもやれるものはなかつた。

すると誰かが「豚の泣き声でもするといい。」と言つた。皆笑つた。

殊に前から僕に厚意をもつていない四五人の仲間、僕が弱れば弱るだけなお責めせよせてくる。

「皆の前をはって歩くだけでもいいじゃないか。出来ないというわけはない。」

「許してやれよ。」と野々村が言つた。

「だめです——だめです。そういう先例が出来るかとのためによくありません。」

僕はますます閉口した。額ひたいから汗が出て来た。

「早くやれよ。」

「もつたいをつけずに。」

僕はますます出来なくなつた。この時、野々村の妹が言った。

「私がかわりをするから許して上げなさい。」

皆、思わぬ処に援兵えんぺいが出たのに驚いた。

「私じやいけません？」

「あなたではよすぎますよ。」

「よすぎるならいいでしょ。」

「逆立ち。」と誰か言つた。皆笑つた。

野々村の妹は立ち上がったかと思つと、皆の前に走つて来て、実に立派に宙がえりをうつた。

その意表外と鮮やかさには皆おどろいて、大拍手喝采かつさいだった。

僕は一時に溜飲りゅういんがさがつた思いで泣きたい程、嬉しく思つた。

野々村はおどろいて言つた。

「おてんば、いつそんなものをならつたのだ。」

皆笑つた。

「いつだか知らないわよ。」

とわざと乱暴に言つた、その表情を僕はたまらなく可愛く思つた。

皆笑つた。

「それだけ出来れば飯が食える。」

「まさか。」

と野々村の妹は兄を睨んだ。

皆笑った。

それで白けかけた座が一時にまた快活になり皆元気になった。

その内に野々村の妹の番が来た。

誰かが、

「もう一遍宙がえり。」と言ったが、野々村の妹は今度はすまして歌をうたった。それも仲々見事の出来で、皆お世辞でなく感心してしまった。

僕はそれ以来、野々村の妹のことが忘れられなくなった。そして野々村が「夏ちゃん。」と妹を呼んでいるのを聞いて夏子だという名をおぼえた。

六

それから十日ばかりたったある日、僕は野々村の処へ行こうと思つて出かけると、途中でばったりおあつらえむきに夏子に出あった。

二人はなれなれしくお辞儀した。